

◆【海員随想】BISKRA号航海記(24)② 新木繁雄

8月24日 アルジェ接岸中

今日はアルジェではラマダン明けの金曜日で、今日と明日は休日だ。本船の賄い方も休みで1人も船に残っておらず、食事の準備ができない。マーケットも休みで、店が1軒も開いていない。果物屋だけは例外らしく、ブドウ、スイカ、メロン、それにナツメヤシなどは売っている。

船の冷蔵庫から牛肉を出してきて、ビーフステーキにした。他の乗組員もそれぞれに自分の好きなものを作って食べていた。パンだけはいつも賄いに置いてある。

午後、砂川さんが訪ねてきた。もう1年以上日本へ帰っていないので「久しぶりの日本酒がとてもうまい」といって、すごい飲みっぷりだ。それに昨日買ってきたイワシを刺身にして出したら「これも久しぶりの日本の味だ」といって喜んでくれた。こんなに喜んでもらえると作った方も張り合いがある。

その後、彼の船のタブラー号へ行き、機関室を見せてもらった。主機も発電機もV型エンジンだった。V型エンジンは小さなスペースで大きな出力が得られ、機関室の大きさに制限があるRORO船には最適な機関といえる。しかしメンテナンスが大変だ。バラストを素早く漲ったり引いたりする必要上、たくさんのポンプが並んでいる。これらのメンテナンスもまた大変だろう。

8月25日 アルジェ接岸中

ラマダン明けのお祭り騒ぎがまだ続いている。昨日に引き続き今日もほとんどの店が閉まっている。魚を買おうと市場へ行ったが、全部閉まっていた。船にあるものを集めてオデンを作り、タブラー号から砂川さんと呼んできて夕食にした。その後、エルビア（ドック駐在員の宿舎）へ行こうということになり、町へ出て走っている車をつかまえてエルビアまで行ってもらった。お金を渡そうとしたが、運転手が「タクシーではないから」と言って受け取ろうとはしないので、持っていたインスタントラーメンを3個あげた。作り方を説明したらすごく喜んでくれて、何度も「サハ（アルジェリア語でありがとう）」と言って帰っていった。

「ここの白タクは2倍、3倍の料金を要求することがあっても、ただで乗せてくれる車には1度も会ったことがない」と駐在員の望月さんが話していた。彼はあまりにも流暢なフランス語を話すからだろう。

1時半ごろ、マージャンを切り上げて船へ帰ってきた。

砂川さんのタブラー号は、明日出帆するかもしれないと言っていた。次の港のマルセイユで彼の契約が終わるから下船するそうだ。

「沖縄へ来たら、ぜひ電話してください」と電話番号をメモしてくれた。